

〈石橋美代子 七宝作品展～現代七宝の世界・干潟の譜～〉 ギャラリートーク

テーマ 現代七宝の世界～輝きと表現の自由を求めて～

日時 令和元年8月18日

場所 エイブル3階研修室

講師 石橋 美代子



▲石橋美代子さん

みなさま、今日はたくさんの方々に集まっていただきまして本当にありがとうございます。私は七宝を始めましてから35年ぐらいになります。試行錯誤の35年で、いまだに考えながら作品を作っております。

今日は、現代の七宝はどんなふうになっているのか、を中心に話させて頂きたいと思います。小学生ぐらいの人に、七宝と聞きますと「え？猫のしっぽ!？」と言うんです。"七つの宝"の事は知らないんです。知名度の低さーそれが現状だなあと思いました。

七宝は、たいへん歴史のある工芸です。世界では、三千年前から歴史の中に登場しています。フランスでは「エマイユ」といいます。「エマイ、エマイ」というんですね。「エマイ」というので思い出すのは、唐津の高取邸に「エマイ」というのがあるんです。そこには他にもたくさん七宝の作品があります。

名称についてですが、日本では七宝といいますが、中国の方では、「琺瑯（ほうろう）」と言っています。皆さんは多分、ホーロー鍋は使っていらっしゃると思いますが、あのホーロー鍋です。「琺瑯」は鉄ですが、鉄に七宝の釉薬をかけて、高温で焼きつけた物をいっています。

また「シャンルヴェ」というのがありますが、これはドイツです。金属の中をほじくって土手を作り、その中に釉薬を入れて、高音で焼く。ほとんどこういうやり方をやっています。

次に、技法についてお話しします。七宝には3つの技法があります。まず、①「象嵌七宝^{ぞうがん}」です。最初に七宝をやろうとした人たちは象嵌から始まったと思われれます。②「有線七宝」というのは「象嵌は難しいなあ、もう少し簡単にできないだろうか」と考えたんだろーと思えますけれども、土手の代わりに線を立てて、その中に釉薬を挿し、焼き付ける技法です。

③「琺瑯」は、中国で発達しております。地金を白い釉薬でおおい焼成、その後、低温釉をかけて、重ねては焼き、重ねては焼き、という技法で、デザインを焼きつけます。今でも、銅板に白い釉薬をかけると「琺瑯」になるんです。「琺瑯」は「鉄に」と言いましたけれども、銅に白い釉薬をかけて、その上に色を重ねていくというのを、現在、教室で盛んにやっ

ております。以上、3つの技法が世界にはあります。

七宝は窯を使いますから、窯業の一種ですね。焼き物です。陶磁器がありますけれども、陶磁器と硝子と七宝が世界の三大窯業と言っています。硝子が発明されてから、七宝という技術ができたようなんですね。だから、硝子というのは七宝のお姉さん格なんですね。

実は、硝子は偶然にできたものようです。地中海の海岸を、フェニキア人だろうと思えますけれどもどこかへ旅をしていた。夜になり、さあ炊事をしようということになりましたが、海岸ですから、釜の支えがない。持っていた硝酸カリの袋をいくつか重ねて、煮炊きをする釜の土台にしたんです。翌朝、起きてみたら、その釜の周りがキラキラと輝いていた。これが最初だと言われています。

これは本を読んで「なるほど、そうなのか」と思ったんですけども、それが硝子の始まりなんですね。その後、いろいろと研究されて、七宝の釉薬ができあがりました。

七宝の釉薬と硝子というのは焼成温度が違います。とんぼ玉というのが今ありますよね。トンボ玉は硝子そのまま再生されてきたものですね。七宝の釉薬は銅板とか金属の板に融着しますが、硝子は融着しません。だから、いろいろと考えてきた過程で、低温釉が発明されたのではないかなと思います。

次に「七宝の歴史」について話します。資料の中に『ツタンカーメンの黄金のマスク』の



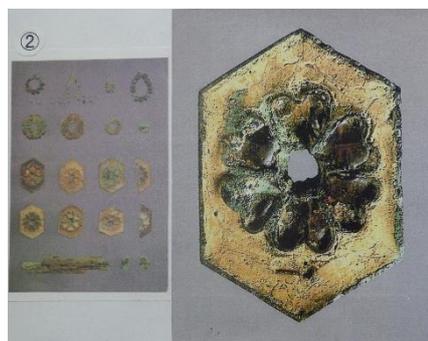
▲ツタンカーメンの写真で七宝の説明

写真を載せていますが、発掘された中ではそれがいちばん古い七宝だろうと言われています。「このどこが七宝なの？なんか全部石みたいね」と思われるかもしれませんが。宝石みたいなのところもありますけれども、縞々模様を見てください。その縞々模様の所、あの深い紺青の色が七宝だと言われているんです。ですから「金属に七宝が焼き付く」ということをこの時代の人は知っていた。現代の学者の方々は「これは七宝だ」と言ってくさっています。

金属に釉薬を焼き付ける技術が既に発明されていたということが分かります。3500年くらい前に技法が使われ、歴史の中でいちばん古い七宝だろうと言われています。いまだにこんなに綺麗に色が出ています。七宝の良さは色が変色しないことと言われるんですけども、ツタンカーメンの黄金のマスクはまさにそれを証明しています。

次に、日本の七宝の歴史についてお話いたします。

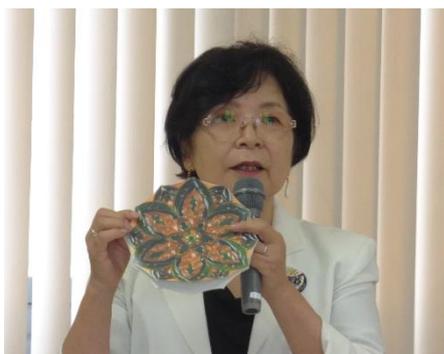
日本でいちばん古いのは、奈良県明日香村の牽牛子塚古墳から発掘されました。この古墳から発掘されたものは、扉の金具なんですけど、銀の板に七宝の釉薬を挿し、しかもデザイン線は土手が付いています。花の枠取りを土手で囲ってあります。そして、土手の中に七宝釉を挿してあります。七宝の釉薬は水で溶かしますので、土手を作って工夫してあるんです。牽牛子塚古墳から



▲牽牛子古墳出土の金具

出てきたものは、色が悪く、不透明な部分があります。

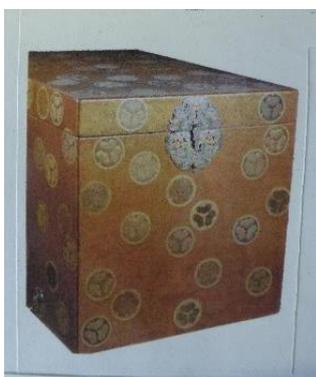
次は、正倉院御物の七宝の話をしていただきます。現存しておりますけれども、色がたいへん綺麗にでて、そのまま残っているというのが、資料の中のこの鏡ですね。『黄金瑠璃鈿背十二稜鏡』といいます。黄金が周りに付いております。金の板が周りにはめ込んであります。この三角の部分が金でできています。「瑠璃」というのは色、「鈿」というのはきれいな貝殻の色。それが昔は宝物だったんだろうと思います。それらが鏡の背中に付いております。「そういう鏡ですよ」という意味なんです。



▲『黄金瑠璃鈿背十二稜鏡』の説明

これは正倉院にありますけれども、正倉院は1年に1回ぐらいしか拝見する機会はありません。学芸員の方が調べた文書がありましたので、私もちょっと型紙で模型を作ってみました。葉っぱの形のを、まず6枚作ります。そして、その間にある小さい葉っぱを6枚作ります。銀の2mm幅ぐらいのもので作ります。もうひとつ中の方にあると思いますけど、真ん中に紐を通す部分があります。これは銀板を型紙通りに切断し、裏からたたいて丸くしてあります。それを1枚1

枚焼成していきます。そしてそれをひとつにまとめ、このように円状に貼っていきます。実物は、18.8cmで2.1mmの厚みとなっています。七宝の部分は綺麗なグリーンが使っています。グリーンと濃い紺青とそれから橙色ですね、この三種類を使っています。真ん中の部分の濃いグリーンは、透明色を使っています。周りのグリーンは不透明です。真ん中はキラキラと輝いていて、この時代に透明色が使用されていたことが、これでわかります。釉薬についてですが、最初発明されたのは不透明色でした。泥七宝と言われるくらいにドロドロしていました。挿して発色させ、焼成しても、綺麗に発色しなかった。先ほどの牽牛子塚古墳の場合は不透明色を使っています。奈良時代に入って透明色が作れるような人が出てきたと思われれます。そういう釉薬の発達があり、現在の私共は恩恵を受けております。



▲取っ手に七宝が施された箱

その後出てくるのは室町時代になります。豊臣秀吉が、朝鮮征伐に行ったときに、陶工を連れてきましたけれども、七宝の職人も連れてきたのかもわかりません。室町時代からどんどん七宝の作品が出てきます。作品といっても、「箱の取っ手」のように、箱の鍵穴のようなところに七宝が施してあります。その程度の物がいっぱい出てきます。その後に「釘隠し」が出てきます。「釘隠し」というのは建材の一部ですね。釘を隠すのに、小さく美しい飾り物を作って色をつけるという日本人はおしゃれだなと思います。「釘隠し」は、いろんな所で出てきますけれども、近

場では、ある旅館の部屋の柱に「釘隠し」がしてあります。密やかに、きちんとやっておりますね。「素晴らしいな、この密やかさって素敵だな、日本人らしいな」と思います。



▲並河靖之作 蝶桜文平皿

七宝は、明治に入りましてから急速に発達していきます。

2人の素晴らしい技術者が現れます。京都の並河靖之さんと東京の濤川惣助さん。2人とも「なみかわ」なんですよ。運命みたいなのがありますがけれども、歳も同じぐらいです。東京の方が2歳年上で、同じ時代に出てくるというのは面白いなと思いましたけれども、この方たちが現代の七宝の基礎みたいなものを作ってくれました。

京都の並河さんは、細密な絵のような作品を作っています。これは有線七宝で、一つひとつ、銀線が立っています。「銀線って

なあに？」と思われるかもしれませんが、持ってきました。これは0.1mmですけれども、とても細い線ですね。銀線は、大小何種類もあります。これを七宝の面に立てていきます。非常に根気があるものですが持ってきました。デザインの通りに外枠を作っていきます。さっき言った土手にあたります。その土手にあたる部分をデザインのとおりにはさみで切っていくんです。ピンセットを使って形どおりにします。直線にも曲線にもなります。土手を作ったら、色を挿していきます。絵を描かれる人は筆を使われますが、私共は「ホセ」というのを使います。櫛を自分で作るんです。これは私流にやるんですが、私は割り箸を利用しています。竹の割り箸というのは「ホセ」として、筆として使うのに非常にいいんです。



▲「銀線」の説明

これをいくつもいくつも作って、色ごとに用意しておきます。ここに色をもってきましたけれど、釉薬というのは水で溶けます。はじめから釉薬を作るのは大変ですから、ある程度の



▲釉薬の説明をする石橋さん

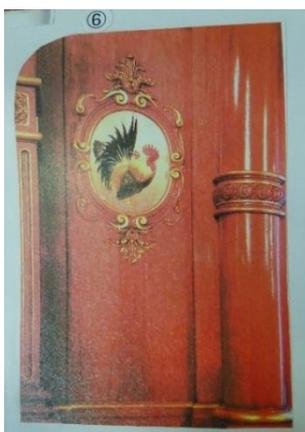
所までは業者さんに頼みます。それから「この色とこの色は自分で作る」という段階で、乳鉢でよくすり下ろして、それを水で洗います。水で洗いますと米のとぎ汁みたいなのが出てきます。そのとぎ汁が無くなるまで洗います。釉薬は、洗えば洗うほど透明感が出てきます。透明の色が出なくてよければ、途中で洗いを止めます。釉薬はどんなに「お粉」にしても硝子質の砂になります。ですから砂は、ふつうの筆ではなかなか掬^{すく}えないんです。

洗って綺麗にした釉薬を入れるのは、皆さんご存知のカメラのフィルムの入れ物です。これも非常に役に立ちます。生活の中から使えるものを再利用しています。

実践しますと、まず、銀線を立てた中に釉薬を全面挿します。銀線は800℃で溶けますので、800℃以下で焼成します。釉薬は焼成したら焼き減りがおこります。ですから、冷

えてからもう1回挿します。2回目も焼き減りします。3回はしないと銀線の高さになりません。「銀線の高さになったからよし」という訳にもいかないんです。手盛りをするとどうしても凸凹が出てしまいます。それが出ないように、今度はヤスリを掛けていきます。ヤスリ200番、400番、600番、800番までやります。割れやすいので「ヨシヨシ」という感じで丁寧に作業します。最後に窯に入れまして、できあがったら鏡面仕上げになっています。鏡面仕上げというのは、見た時に自分の顔が映るぐらいに、つるんとなっていることが必要なんです。

明治の時代に、2人のナミカワさんは、素晴らしい作品を世に送り出しました。



▲瀧川惣助作七宝作品
(迎賓館 花鳥の間)

京都の並河さんには、絵を描くのに日本画の先生が就いています。並河さんたちの時代までは、七宝焼きは分業制でした。絵を描く人、それから七宝の釉薬をはめる人、それから銅板を叩く人、いろいろあるんですが、全部分業でやっています。最終的に纏めたのが並河さん。

もう1人の東京の瀧川さんは、「無線七宝」という七宝作品を考え出しました。資料を印刷してきましたけど、東京の四谷にある迎賓館の花鳥の間に作品があります。大きさ50cmの楕円形の作品が、30面に飾ってあります。それはそれは素晴らしいです。

漆の赤い柱に、ぱあっと綺麗な七宝の輝きがあるわけですね。東京に行かれたら、ぜひ観てきてください。

瀧川さんの作品は「無線七宝」と言っています。デザインの枠取りに線が無いんです。最初は、一応線を立てて、外枠を作ります。本当に手盛りをしたところはなにげに判りますけれども、本当にきちんと土手を作った方がいい所は土手を作っているんです。そして釉薬を全部盛り付けたところで、線を外します。勿体ない話ですが、線を外します。そうすると焼く時に「ぼかし」が出てくるんです。隣同士の境目が無いから、ぼかしが出てきます。

この2人のナミカワさんは、現代でいえば重要無形文化財保持者です。技術が非常に素晴らしい人たち。当時は、帝室技芸員といました。人間国宝は、七宝ではこの2人しかおりません。この方たちが亡くなられてから、100年経ちますが、いまだに七宝で国宝級の人は出ておりません。2人のナミカワさんは素晴らしい作品を作られました。技術の優れた作品として、現在も愛されています。

この2人の作品は、外国にお土産として持っていかれて、日本にはほとんどありませんが、京都の「並河靖之七宝記念館」には並河さんが作られた物が展示してあります。

"現代の七宝"は、「技術を重視したもの」「創造性を主にした芸術作品」「ジュエリー関係」という3つの方向に向かっております。

戦後、七宝が盛んになったのは電力会社のおかげかと思います。電気窯が普及して、電力会社が教室を開き、主婦層に広がりました。それが昭和50年代です。私は60年代から始

めました。盛んになっては廃れ、盛んになっては廃れという流れを汲んできております。

今は、七宝人口は30万人ぐらいいると言われていています。最初にご婦人方の趣味だったものが、今度は美術性、芸術性に向かっていくご婦人が出てきて、日本工芸会や日展で入選を続けるようになったというところですよ。

では、私の作品作りについて話をさせていただきます。「干潟の譜(うた)」というのが今日の本題なんですが、私はこちらに来ましてから、「ああ、鹿島ってなんか、ゆったりとしていいわね」と思いました。鹿島の道の駅に行って干潟を見ていたら、「わあ、凄いな、しかも銀色だわ」と思ったのです。その次に行った時には、引き潮時で、地紋が凄く綺麗だったことを忘れられません。地面の模様が、地紋というくらい綺麗なんです。「これは良いわ、これをやっていこう」と思ったの。しかも朝方がいいと。私は早起きが得意で、朝日が出る前の情景はどんなもんだろうと思ひまして、蟻尾山まで行きました。すると、朝日が出る直前に、本当に銀色に輝いた。「わあ綺麗！」と思ったんです。

「これを私の作品のひとつのイメージとして取り入れよう」とその時に考えました。私は、風景とかそういうものではなく、心に閃いたものを、画面に映しています。要するに抽象画になります。それを、平面構成で表すわけですが、平面は、構成力が非常に大切なんですね。ただ平面を見ても、あまり感動しませんよね？それで、私はそこに四次元の世界を入れたらどうか、と思ひました。三次元は、私たちが居る、縦・横・奥行の世界ですね。では、四次元は？四次元はもうひとつの空間がある、と。その空間をまとめて一つの作品になるかどうかというのを今、私はやっております。



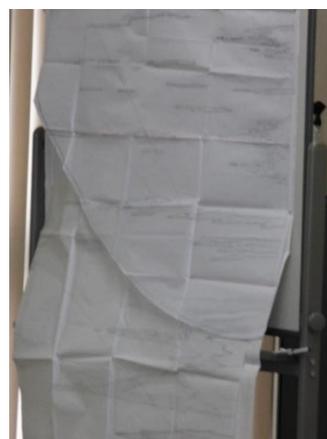
▲石橋美代子作「潮満ちて...2018

それで床の間に展示している作品はそんな感じで作ったんですけどね。私が求めているものは、異次元のものを一つにできるだろうか、それがちゃんと感動を与えられる作品となるだろうか、というところなんです。

それで実際どんなふうにして作っているのかというと、原寸大の用紙を持ってきましたので、広げて説明させていただきます。原寸大に至るまでに、何枚も何枚も絵を描くんですね。最初は見に行つて「あ、こんなもんかな」と頭の中に入れて、家でちょっと描きます。

その次は、「ちょっとこれに直線を入れてみようかな」と、線を入れていきます。

その次、曲線を入れてみます。ちょっと波の形、「うーん、こんな感じかな？」と、なるわけですね。最終的に、これを纏め



▲手書きの原寸大用紙

てですね、色を入れていきます。書いてある数字は絵の具の番号です。たくさん色を使っています。

最初の色から何回か推敲を重ねて、色を少し無くしました。七宝は、輝きが出てきますので、絵と同じようにはできないんです。



▲「潮満ちて…2018」の原画

また、原画の拡大も自分でしましたけれど、拡大しますと、途中が伸びすぎるといった場合があるんです。その辺を、消していきます。そして、その上にまた図面を描きます。全体に波の形を乗せたら、また面が違いますから、私の中では「四つの面が出来上がったな、うん、これでやってみよう」ということになります。それで、波を乗せてみて「あ、この波でいいわ」というところまで何回も何回も描き直します。私は、波に「希望」というのを乗せて描きます。「これ希望よ」「どういう希望?」「うん、こういう希望」と、独り言を言いながらやっているわけですね。

それから部分的に図面を描いていきます。これで全体の図面がやっと完成しました。描き終わったら、次の作業は銅板を切断することです。それが終わったらいよいよ実践に入ります。銅板は37cmの尺物を使用。銅板にマスキングインクを使い、フリーハンドで描いてから、「エッチング」という方法で凹凸をつけていきます。



▲エッチングされた銅板

一昨日、エッチング液（塩化第二鉄原液）に6時間漬けて作ったのを持ってきました。銅板に凹凸をつけ奥行きを出す、という感じで、地紋みたいな所を作っていくわけですね。

私は、油性のペンで広い画面全体にフリーハンドで描いていきます。油性ペンを何種類も使って「ここは細い方がいいかな?」「ここは大きい方がいいね」なんて独り言を言いながらやるわけですね。そして、乾かしてからエッチング液に浸けます。床の間コーナーに

飾らせていただいているのは、そういう作業をしております。

最近はおの小さな物も、全部エッチングをしております。床の間コーナーの作品は、エッチングの後、波の部分を糸鋸で切って、銀色を出すためにメッキ屋さんに出しています。

次は、下の方の石畳をイメージした部分を、遠近法で描いていきます。そして、デザイン線にそって銅板を切断します。持っている窯に入る大きさに、しかもデザイン線を崩さないように切っていきます。その作業のあと、今度は焼成に入ります。

作品の下が済んで、上が済んで、あとは真ん中ですね。真ん中が最後に残るんですが、銅板は窯の中に入れたり、水に浸けたりしている間に縮んだり伸びたりしますので、真ん中で調整するわけです。最後に、このブルーの所ですね。今回は、ツタンカーメンのブルーに似

せて色付けしてみよう、というところでやってみました。ブルーを出すだけでも 10 種類の絵の具を使っています。7回から8回、窯の中に入れては出し、出しては入れを繰り返します。そのようにして色を出しました。

最後に、波が石畳にかかっているところです。ここでまた図面を描いて、仕上げていくわけです。このような作業をして、床の間に展示してある、あの作品はできあがりしました。

私は、今年も、干潟をテーマにして作品作りをしておりますけれども、どんどん変わっていく自分というのが表わせればいいかなと思います。

先ほど、地紋の話をしましたけれども、地紋の所に今年のハイライトや、今年感じたことを、エッチングをする時に描き込みます。床の間コーナーの作品にも、隠した絵や字が入っています。2階に行って、御覧いただいて、「どれが隠し絵、隠し字だろう？」と思って見てください。2018年は、平成が終わるという年ですね。だからそれに関する事を描いて、図案化しております。いちばん自分を表現できる部分だと思っております。これで私の作品制作の説明を終わりたいと思います。

最後になりますが、先ほど言いましたように、七宝人口は30万人ぐらいおりますが、「地方にはあまり知られていない七宝のことを皆さんに解って頂けたらいいな」というところで私は動いております。

本日は御清聴ありがとうございました。これで終わります。